



指扇中だより



= 自信と誇りに満ちた指中生 =

〒331-0078 さいたま市西区西大宮 3-31-1 電話 048(624)6234 FAX 048(624)2479

『白いページの中に』

校長 おお うち のり かず
大河内 範一



秋の読書週間になったが、読書にまつわる思い出はたくさんある。小学校高学年では、モーリス・ルブランの『アルセーヌ・ルパンシリーズ』を、自分の小遣いで毎月1冊ずつ集めていた。神出鬼没の怪盗紳士が登場する冒険小説で、ハラハラドキドキしながら読んでいた。『奇巖城』、『813の謎』は特に印象に残っている。

中学3年生の冬は、日本文学に傾倒していた。武者小路実篤の『友情』を読み、「青春時代において、男同士の友情と恋愛とではどちらが大切か」というようなことを受験勉強の傍らに考えていた。懐かしく、ちょっと恥ずかしい。

高校3年間は、本を年間100冊読むことを目標とし、学校や公共の図書館によく通っていた。目標は達成したが、ジャンルとしては赤川次郎やアガサ・クリスティなどのミステリー（推理小説）ばかりだった。夜、ちょっと読書をしてから寝ようと読み始めたら最後、途中で止められなくなり、犯人のトリックが暴かれる頃には、白々と夜が明けていたということもよくあった。

大学に入る前の浪人時代は、勉強のために図書館を利用することが多かった。朝、図書館の開館前から並び、無事に座席を確保した後は、夏目漱石の『明暗』や井上靖の『氷壁』のような分厚い本を開き、夕方の閉館まで読み続け、1日中勉強したかのような顔で帰宅したこともあったが、もう時効だからよしとしよう。

最近では、ブック・オフに立ち寄ることが趣味の1つになっている。100～200円のコーナーに行っては、割引率が高く、新品と変わらない綺麗さを保っている本を見つけて購入するというのに、ちょっとした喜びを感じている。

さて、何かのコラムで読んだのだが、読書の方法には、本をじっくり読む『精読（せいどく）』、早く読むことをよしとする『速読（そくどく）』などがあるが、気になった本を手当たり次第読んで、興味があるページがあれば目を止めるという『乱読（らんどく）』をすすめている読書家がけっこう多いとのことである。乱読は読書量を圧倒的に増やすことができ、「思わぬものを発見する力」が身に付くとも言われている。とにかく、読書はいいこと尽くめなのである。

さあ、皆さん。知識を増やすために、創造力を磨くために、楽しい時間を過ごすために、視野を広げるために、読解力を高めるために、脳の活性化のために、ストレス解消のために、どんどん本を読もう！くれぐれも買った本を読まずに積み重ねておくだけの『積読（つんどく）』にならないように気を付けましょうね。